神奈川県立国際言語文化アカデミア

開所５周年記念　公開講座

神奈川県立国際言語文化アカデミアは、平成23(2011)年 1 月に開所いたしました。平成28年、開所５周年を記念し、元・目白大学教授・東京大学名誉教授 岡秀夫先生(2 月 28 日)、淑徳日本語学校 非常勤講師 いじょんみ先生(3 月 6 日)、東京学芸大学教授 粕谷恭子先生(3 月 12 日)をお招きして、公開講座を実施いたしました。
各先生方からのご寄稿、あるいは、当日のお話の要点を掲載いたします。

開所５周年記念公開講座

異文化理解のための英語コミュニケーション

Communicating in English for Cross-cultural Understanding

岡 秀夫

OKA Hideo

０　エピソード

まず、今日の話題に関連したできごとを、つい最近の身近なエピソードから２つばかり紹介したい。

その一つとして、去年の秋に日本を訪れたオーストリア人夫婦（もう何度も日本には来ているが）を驚かせたのは、道路や壁がとても綺麗で、電車が時間通りに来るという、我々にとっては当たり前のことであった。その裏には、ゴミが散らかっている道路や落書きだらけの壁が至る所にあり、電車が遅れるのは当たり前という背景があるからである。さらに、お店やレストランでの店員のスマイルとおもてなしに感動していた。最近、EU では難民の問題もあり、サービス精神が劣悪化してきているという現実があるからである。しかし、そのような良いことばかりではない。原宿に行くと、醜い電線や看板が美観をそこね、電車ではスマホに忙しい若者が優先席を占拠し、お店などでは残念ながら、外国語があまり通じない。コミュニケーションもことばなしでは、意思がなかなか通じず、国際化も望めない。

もう一つのエピソードは、２年ぶりにアメリカから帰国した日本人家族の印象であった。母親は道路が狭いのと、信号が多いのに驚いていたが、逆に、信号待ちのおかげで気持ちの上で安らぐと言ったのは、そういうとらえ方もあるのかと面白い限りであった。また、４歳の子供は靴を履いたまま家の中に駆け込み、レストランで出されたおしぼりを見て、「これ何？」と母親に尋ねていた。この年代ではまだ言語も文化も十分に定着していないので、日本の習慣を忘れてしまっていたのである。やはり、言語、文化が定着するのはもっと後で、「9 歳の壁」あたりであろうと考えられる（箕浦 2003）。さらに、７歳になる子は、近くの小学校へ友達と一緒におしゃべりしながら登校する子供たちの姿を見て、とても羨ましがっていた。アメリカでは、安全性の問題から、子供が 10 歳になるまで親が送り迎えをしなければならないからである。

このように、日本では当たり前のことが、異邦人から見たら当たり前でなくなる。異文化への気づき、意識が高まると、それがはね返って自文化の再評価につながる。良い点も悪い点も見えてくるようになる。つまり複眼になるのである。そのような異文化との接触の中で、意思疎通の道具としてことばがある。いや、言語は意思疎通のためだけでなく、後で見るように思考の道具でもあり、世界観につながる。ここでは異文化間でのコミュニケーションの問題を検討し、より良い異文化理解につなげていきたい。

１　コミュニケーションとは？

（1）動物のコミュニケーションとどう違うのか

コミュニケーションは「意思伝達」と訳されるが、我々はどのように意思を伝達しているのであろうか。動物を見てみると、イルカが水の中でピーというような音を立てて意思伝達していることがわかっている。とりわけ有名なのは、ミツバチのダンスである。その羽のふるわせ方と回り方で、どちらの方向のどれだけ

の距離のところにおいしいエサがあるのかを伝えているそうである。犬や猫も、身体的動作に加えて、ワンワンとかミャオミャオという鳴き声の音調をいろいろ変えることによって、威嚇とか愛情などの意思を伝えているようである。

そのような動物のコミュニケーションと、人のコミュニケーションが根本的に違うことがある。それは、動物の場合、“here & now”の原則に限られるという点である。つまり、「今、ここ」でのことしか表すことができない。１週間前のできごととか、海外で起こったことを伝えることはできない。また、抽象的な内容も表現することはできないし、文字による伝達もない。

（2）コミュニケーションはことばだけではない

そのように他の動物とは区別される特徴を持った人間のコミュニケーションは、言語だけに限られるものではない。ノンバーバルな、言語を介さない伝達が大きな部分（情報の 70%とも言われる）を占めている。顔の表情やジェスチャーのたぐいである。典型的には、パントマイムによってかなりのことが伝えられることを我々は知っている。サイレント映画のチャプリンを思い出せばよい。

それと同時に、かなり多くの部分はことばに付随した準言語によって伝えられることを忘れてはならない。つまり、音調（トーン）や抑揚（イントネーション）である。これらの要素によって、ことば自体のもつ意味合いが変わってくる。例えば、“I beg your pardon.”がいい例である。これを上昇調のイントネーションで最後を上げて話すと、「もう一度言ってください」という依頼になり、最後を下げると“I’m very sorry.”という謝罪の意味合いを持つ。

中学校で“What are you doing?”のイントネーションに関して、「Wh-疑問文は最後を下げる」という風に教える。しかし、それは何ら特別な感情も含まれない中立的な場合であって、文字通り「何をしていますか？」と訳す。ところが、実際の言語使用場面では、声を荒げて“WHAT ARE you doing?”とか“WHAT are YOU doing?”というように強調して発話されることが多い。このような場合には、「お前、何やってんだ！」という感じで、相手はあきれかえっていたり、けなしているので、まともに“I’m doing ～”なんて答えず、“I’m sorry.”とでも言っておいた方が無難である。また、同じ文でも、小さな子供たちが仲良く遊んでいるところに「何やって遊んでるの?」とやさしく問いかける場合には、最後を上げて上昇調で言う。

（3）ことばのコミュニケーションは文字通りでもない

大人のレベルの言語使用で注意しなければならないのは、このような準言語が文字通りの意味をこえて、話し手の微妙な心情や態度を表すという点である。いわゆる「ことばのニュアンス（含蓄）」である。上司にコピーを頼まれたときに、「今だめです！」とあからさまに拒否したのでは相手が気を悪くするので、「今ちょっと手が離せないのですが…」というように表現を和らげ、人間関係を円満におさめようとする。”I can’t do it now.”の最後を fall-rise のイントネーションにして、そのようなニュアンスを伝える。つまり、now を ↺ という風に発話し、“…, but maybe later.”という含みをもたせるのである。

対人間のコミュニケーションであまり直接的に伝えると、人間関係を傷つけたり、大人げなかったりする。それゆえ、話し手は人間関係を損なわない形で、少し遠回しに自分の意図を伝えようとする。他方、聞き手の方は単に文字通りの意味をとるだけでなく、その背後に隠された話し手の意図を推量する必要がある。そ

こには、含蓄があったり皮肉が含まれていたりする。

例えば、暑い夏の日、外の仕事から帰ってきた旦那さんが汗を拭き拭き、「あー、今日は暑かったなー！」と言ったとき、奥さんが「はい、とても暑かったですね。」と文字通りの返答をしたのでは話し手の本当の意図が理解されたことにはならない。旦那の期待に答えるためには、「はい、ビールが冷えてますよ。」というような反応が期待される。それでやっと、この文の持つ間接的な発話行為が成功したことになる。また、学生が自分のレポートの出来具合を教授に尋ねたところ、”It was well typed.”という返事が返ってきたら、学生は喜んでいいのだろうか。レポートの内容について直接触れず、タイプのことを話題にする教授の意図は、その裏に「出来はイマイチだった」ことが潜んでいることに行き当たる。直接的に明言したのでは学生が気落ちするだろうからという配慮からか、それとも学生の不勉強を皮肉った発言なのか、そこのところは状況による。

２　異文化コミュニケーションとは？

異文化コミュニケーションの「文化」とは何かを考えてみたい。「文化」は、大文字の Culture と小文字の culture に区別される。大文字の Culture とは、ゲーテとかミケランジェロとかベートーベンというような巨人に代表される文化遺産をさすのに対して、小文字の culture は一般の人々の生活習慣や伝統、ものの考え方をさす。ここで我々が関心があるのは、この小文字の方の culture である。この後者の小文字の「文化」は、（1）思考や行動の枠組みで、（2）後天的に学習され、（3）集団に共有される、と特徴づけることができる。

われわれは異文化と言うとすぐに海外を連想するが、身近なところにも異文化は存在している。日本の中でも都会と田舎でいろいろな面で違いがあり、地方から東京に出てきた場合はもちろんのこと、東京の中でも、慣れない人はあの原宿や歌舞伎町の雑踏にはカルチャー・ショックを受ける。また、地域性だけでなく年齢的な要因も関わり、シニア世代は若者文化にギャップを感じ、驚き、あきれる。さらには、性別による文化差、職業別の文化など、さまざまな異文化が存在する。

最近は性差を語ることはタブー視される傾向があるが、筆者自身のエピソードを一つ紹介したい。筆者とオーストリア人ワイフとのおしゃべり行動の違いは文化的なもの、つまり「日本文化 vs.西洋文化」だと思い込んでいたが、根本的にはジェンダーによるものであることに気づかされた。というのは、筆者とワイフのおしゃべりの量と質の違いはアメリカ人夫婦の間でも一般的に見られ、“report talk vs. rapport talk”という対立で表される（Tannen 2001）。つまり、男性は何かの情報を伝達するために話すのに対して、女性は人間関係を円滑にするために話すのである。それゆえ、我々二人の違いの根本的な原因は性差によるものであって、地域差ではないと認識させられた。

日本で異文化の問題が注目されるようになったのは、1970 年代である。日本企業の海外進出が盛んになり、海外でのいろいろな文化摩擦を経験し、異文化適応の問題が大きく取り上げられるようになった。ことばの問題だけでなく、日本という島国のやり方や考え方が海外の文化とうまくいかなかったからである。その原因を求めて、『タテ社会の構造』（中根千枝）や『甘えの構造』（土居健朗）に代表されるように、日本人論が盛んになった。

異文化を知る意義は、海外に関する知識の問題だけでなく、外国に行ったら日本では当たり前のことが当

たり前でなくなり、日本の文化を再認識、再評価するところにある。いわゆる「井の中の蛙」的なぬるま湯状態から脱皮し、複眼的な視点を身につけるのである。海外に出ると、「ああ、そうなのかー！」といろいろな違いに気づかされる。それは必ずしも悪いことばかりでなく、日本の優れた点、日本人のすばらしさなど、プラスの面にも気づかされる。例えば、海外へ行ったら安全と水はただと思うな、と諭されたことに納得し、周りへの気づかい、おもてなしの心とか日本文化の美徳を再認識させられる。

異文化の人とのコミュニケーションは、多くの場合、国際共通語となっている英語で行われる。フランス人と出会っても、タイからの観光客に対しても、リンガフランカとしての英語が使われる。それゆえ、今日の国際化された社会では英語力を高めることが非常に重要な課題となっている。しかし、異文化コミュニケーションは英語のスキルの問題だけではない。2020 年の東京オリンピックを一つの目標として、海外からのお客を案内することを想定した場合、スキル以外の要素も見逃すことができない。例えば、お寺に案内したときどう説明するのか。いろいろな仏像があり、お釈迦様から観音様等々、その名前はどう説明すればいいのか。それらの仏像の由来は？また、その役割は？お寺等にかかっている古い掛け軸を見て、日本で知識人と見なされている人でもそこに何が書いてあるのか読めないことは、異文化の人には理解しがたい。また、和食でお寿司屋さんに行ったとき、いろいろなネタをどう説明するのか。特定の魚の名前を知らなければ、“a kind of fish … another kind of fish”ではどうにもならない。すき焼きに入れる具や野菜の数々も同様である。もし日本語で知らなければ、英語でわかるはずがない。それゆえ、まずは日本語で教養を深め、広めておく必要がある。

それと同時に、相手の文化に関する知識も忘れてはならない。とくに、イスラム教でポークを食べないとか、インドでは牛は聖なる動物と見なされているというような文化的背景が、食べ物の選択に影響する。また、最近はベジタリアンの人も多いので、そうすると肉や魚は避けなければならない。しかも、問題がややこしくなるのは、ベジタリアンの程度が人によって違う点である。中には、ダシを使ったみそ汁もダメという厳しい戒律の人もいる。

このような事例から明らかになってくることは、海外のお客を案内するにも英語力だけでなく、日本文化に関する知識、教養が備わっていることが必須となる。そして、それを積極的に伝えようとする態度、相手を理解しようとする態度が大切になる。まとめると、英語のスキルに加えて、知識と教養、および態度と人格が備わっていることが求められ、結局、異文化コミュニケーションは全人的な活動となる。

その中で忘れてならないのは、知識、教養と言ってもただ知っているだけでなく、実際のコミュニケーション場面で、相手と場の状況によって調節するストラテジー（方略）がなければならない。相手のニーズに応じて、情報の量と質を調節するのである。例えば、日本のお風呂の入り方に関して、日本が初めての人に説明するのと、もう日本に何度も来ている外国人とでは説明の量も質も異なる。初めての人の場合には、相手の人の文化的背景と対比させて、例えば“Please rinse yourself outside first. Don’t use the soap inside. When you have finished, don’t let the water go.”などと、日本式のお風呂の入り方について、相手文化との違いをもとに効果的に説明する必要がある。それに対して、日本文化になじんでいる外国人なら、そのような説明は冗漫になってしまう。つまり、異文化コミュニケーションにおいて適切とされる情報は相手によって変動する相対的なものであり、その場のニーズに合うよう調節しなければならない。

3　言語と文化

コミュニケーションは言語によるものだけではないにせよ、言語はコミュニケーションの主要な部分を占め、文化の大きな担い手となる。言語はその社会集団に共有された文化の中に深く根を下ろし、その文化に根ざしている。我々はそのような文化と一体になった言語で考え、そのことばを使って意思伝達する。それゆえ、言語と文化は切り離すことのできない関係にある。

この言語と文化の深い結びつきに関しては、「サピア＝ウォーフの仮説」（言語相対論）で説明される。つまり、我々の宇宙観や世界の切り取り方、経験の様式などは、用いる言語が異なれば、それに対応して異なる。それゆえ、言語は経験の仕方を規定する働きを持ち、我々の思考は母語によってあらかじめ定められた形式に則して展開するのである。

よく例に挙げられるのが、エスキモー、いやイヌイットの人たちの「雪」の概念で、雪にも形状により違った単語がある。日本語では「～雪」と形容することによって区別するだけで、「雪」という一つの概念としてとらえる。それに対して、彼らは別の単語によってそれぞれの雪の概念を細かく範疇化している。もっと身近なわかりやすい例を挙げると、日本語における“rice”が面白い。つまり、我々は rice の形状によって「稲、米、ご飯」という風に別々の単語で使い分けるが、英語では rice の前に“raw rice, cooked rice”という風に形容詞をつけて区別するだけで、rice というひとくくりの概念でとらえる。われわれがそのように差別化して認識するのは、rice が日本の社会、文化において極めて重要な意味合いを持つため、そのように区別することが必要であるからに他ならない。

日本社会の特質を映し出す例として、例えば自分の兄弟を紹介する時、「これは私の弟です」と言うが、英語では（よほど区別する必要のない限り）“brother”でしかない。つまり、英語文化では年齢が上か下かは別に問題にならない。これは日本の縦社会構造を反映したもので、学生が「部活の先輩、後輩」と上下を区別して言うような表現にも現れている。この縦社会と対比されるのが、アメリカで父親や大学の先生までをも first name で呼ぶ横並びの文化である。そのようにとらえ方が違うと、異文化に接した時にどうも心理的に落ち着かない経験をしたのは、筆者だけではないだろう。この年になって first name で呼ばれるのは、何かムズムズするものを感じる。

この問題が深刻化するのは、会社の人間関係においてである。例えば、会社で日本人の上司がアメリカ人女子社員に“I don’t think so.”とか“Why?”と言われた時、上司は気分を害したり、穏やかな気持ちでいることができない。彼女にとっては文化的に自然であっても、彼にとっては不遜に映るからである。しかし、英語文化が全てストレートな発言を好むと考えるのは単純化しすぎである。英語においてもやはり丁寧さの原理というものはある。一つの例として、ユースホステルに泊まっている日本人学生が、昨晩寒かったので毛布をもう一枚借りたい時、受付に行ってぶしつけに“I want a blanket.”と言ったのでは、受付の人が気を悪くしてしまう。いくら英語でもストレートに言えばいいというものではなく、やはり丁寧さを配慮して、“Would you mind ～?”というような表現を用いるか、さらに、“I felt really cold last night. So ～”というような前置きをつけることによって表現を和らげるのである。

文化の違いは発想の違いになる。日本語と英語の文化的な発想の違いは、「ある vs.なる」で表される（池上 1981）。例えば、デパートへ行って、「男性の靴はどこに置いてありますか」と尋ねたい時、英語では一般的に“Where are there ～?”と尋ねるのではなく、自分を前面に出して“Where can I find men’s shoes?”と言

う。このような発想の違いは、決まり文句となっている表現に多い。日本ではお土産を差し出す時に「つまらないものですが」と、謙譲表現を用いる。直訳的に“This is nothing good.”ではおかしい。文化的に対応するのは、“This is something for you. I hope you'll like it.”というような具合になろう。アメリカの研究所を訪れていた日本人エンジニアが別に悪いことをしたわけでもないのに、いつも“Sorry.”ばかり繰り返していたので、向こうの同僚は不思議がったそうである。これは日本語でお礼の意味で「どうもすみません」と言うのを直訳的に sorry に置き換えた誤りで、このような場合には“Thanks.”あたりが適当であろう。

日本人が混乱する表現に、否定疑問文がある。“Don't you 〜?”と尋ねられて、日本人が“Yes, I don't.”というように返答すると、英語では矛盾する文になり相手は戸惑ってしまう。これは、「はい、〜ではありません」という日本語での発想を直訳した誤りである。それに対して、英語では陳述の内容が肯定であれば Yes、否定であれば No となる（それゆえ、英語では“No, I don't. ”と言う）のに対して、日本語では発想が異なり、「はい、（あなたのおっしゃる通りです。つまり）〜ではありません。」という思考回路が働くからである。文化的に、相手に対する配慮の方が命題よりも重視されるのである。

このようにさまざまな発想の違いがありはするものの、異文化コミュニケーションにおいて、違いばかりを強調し、「日本は特別だ」という風に思うと危険である。人間性には共通するものがあり、表層的な言語表現では差異があっても、深層では共通するものが潜んでいることに気づく。その良い例として、「もったいない」という表現がある。この表現はユニークな日本文化の特徴とされる。ノーベル化学賞を受賞した田中耕一氏も、自分の発見がもったいないという気持ちから発見につながったことを紹介した中で、この表現は日本にしかない特殊なものだと述べた。しかし、「もったいない」を直訳的に表す一語を探しても見つからないかもしれないが、発想的に、「大切すぎて捨てるにはもったいない」という思考回路を考えれば、“too precious to throw away”と訳すことができる。これが「文化的意訳」の手法である。異文化コミュニケーションにとっては、これが重大になる。直接表せなくても、多くの場合、それが何を意味しているのかを考え、和文和訳を介して文化的に対応する表現を見出すことが肝要となる。ぶっきらぼうに“It's too Japanese!”と言って切り捨ててしまうような態度では、異文化理解はほど遠い。

4　日米コミュニケーション・パターン

言語文化を具体的に比較するために、ここで日本とアメリカのコミュニケーション・パターンに焦点を当ててみよう。日米のコミュニケーション・パターンは、「高コンテキスト文化 vs. 低コンテキスト文化」という形で対比される（Hall 1976）。高コンテキスト文化では、人々が深い人間関係で結ばれ、情報は広くメンバー間で共有され、単純なメッセージでも深い意味を持つ。そこでは行動規範が伝統的に確立され、コミュニケーション形式も明確に規定されている。それに対して、低コンテキスト文化では、メンバー間で共有される前提が限られているため、個人は明確なメッセージを構築して、自らの意図を他者に押し出さねばならない。つまり、ことばで説明し、自己主張する必要がある。

このような違いのため、ことばで言わないとわからないアメリカ社会に対して、日本では、察し、以心伝心が働く。海外を旅行していて絵葉書を買い求め、切手もほしいので“Do you have stamps?”と尋ねると、“Nope.”とそっけない答えが返ってくる。日本人としては、もしここに置いてなければ、どこに行ったら手に入るのか、教えてくれることを期待する。しかし、アメリカ文化では、そのためにはさらに“Where can I get

them?”と問いたださなければならない。というのは、アメリカ人としては“You didn’t ask.”という心理が働くからである。ことばではっきり言わないと、日本人の期待する察しや思いやりは期待できない。

このように、「高コンテキスト vs.低コンテキスト」という文化的な違いが日米のコミュニケーションに大きな影響を与えるが、その中で、言語化される「発想」のプロセスに焦点を当てると、そこで見られる違いは大きく次の３つに分類できよう。これまで挙げた事例から、（1）rice, brother の例に見るように、単語レベルでどのように範疇化するのか、（2）「つまらないもの、すみません」というような文化的色彩の濃い表現、（3）デパートでの会話の例で見たように、どのように文を組み立てるのか、という３つの段階に分けることができる。

そのような発想が違うことに加えて、異文化コミュニケーションの問題が複雑になるのは、その背後に文化があり、価値観が違ったり、論理構成が違ったりするからである。価値観の違いを表す典型的な現象はいわゆる「silence（沈黙）」の問題である。「沈黙は金なり」と言われるが、silence は本当に golden なのか、沈黙の持つ意味が二つの文化で大きく異なる。日本では、一般に、黙っている人を奥ゆかしいととらえるのに対して、アメリカでは意見のないつまらない人とみなす。ほとんど発言しなかった日本人学生の印象を、日本人学生は６割が好意的に評価したのに対して、アメリカ人学生は９割が否定的に評価した。落語においては「Silence＝間（ま）」が重要な意味合いを持つのに、アメリカ公演では間延びするという風に受け取られた、とある落語家は嘆いていた。この沈黙と silence の持つ文化的意味合いの違いと関連して、turn-taking（順番の取り方）の違いが興味深い。

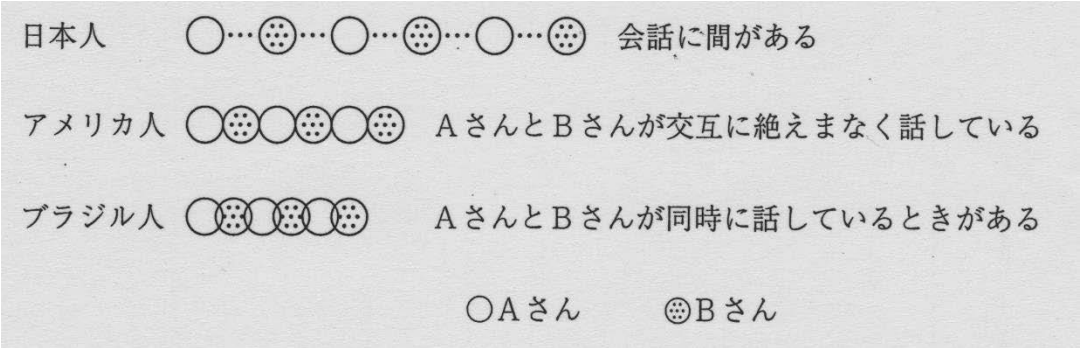

図１：順番の取り方（西田 2000: 97）

この図に見るように、日本的なコミュニケーションでは間があくのが一般的である。それに対して、アメリカ式コミュニケーション・パターンでは交互に絶え間なく進む。ちなみに、第３の型としてブラジルの例では、相手が話し終わらないうちから同時に話すのである。その結果、日本人的態度では、自分が話す機会がなかなか得られず、相手からは退屈な人と思われてしまう。

日米コミュニケーション・パターンの違いの３つ目の分野として、論理構成が違う点がある。そのため、TOEIC で高得点を取る日本人ビジネスパーソンでさえも、仕事の交渉になると困難を感じる。相手とのやりとりにおいて、キャッチボール的に受け取り、投げ返し、それを通して自分の論点をきちんと主張し、相手に納得してもらい、最終的には互いの合意点を見つけねばならない。ところが、Kaplan（1966）が図式化

しているように、論理の構成の仕方が言語文化によって異なるため、異文化コミュニケーションで問題が生ずる。

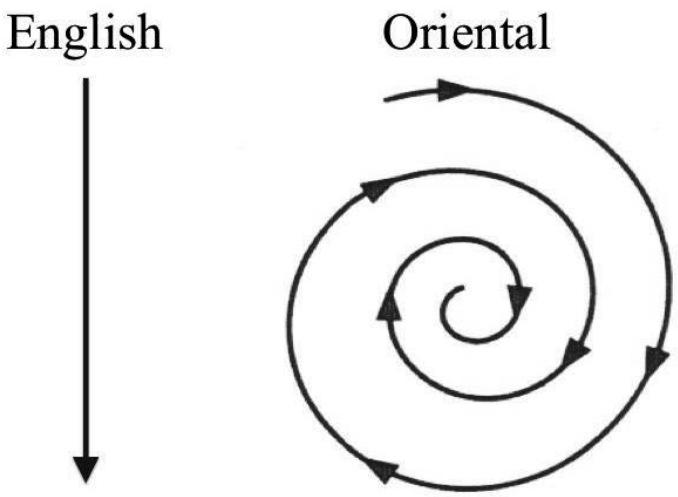

図２：英語と日本語の論理構造（Kaplan 1966: 12）

英語がストレートであるのに対して、日本語的思考はぐるぐる回って徐々に結論に向かう。典型的な英語でのスピーチが、“I like ... for three reasons. First, ～”というような形で結論を先に提示し、それからその理由を述べるのに対して、日本語では、周りの状況説明から入り、結論は最後になる。そのため、英語的な心理から見ると、日本語の論述では一体何が言いたいのかはっきりせず、イライラする。日本文化の中で育つと、無意識のうちにそのようなコミュニケーション・パターンが身につくのは避けがたい。そのため、国際舞台では言語の切り替えだけでなく、文化文法の切り替えも求められることになる。

次の対話は、文部省の教員海外視察団の通訳として同行する通訳を選考する面接の一場面である。アメリカ人の面接官と日本人教員の思考パターンの違いがカッコの中に示されていて、興味深い（Sakamoto & Sakamoto 2004: 46–47）。

Q: What is the major discipline problem in your school?

A: Our school is about fifty years old…

Q: (*What is he talking about? I didn't ask how old his school was. He didn't understand the question. I'll repeat it.*) What is the major discipline problem in your school?

A: (*Why did she interrupt me? Why can't she wait for me to finish answering the question? I'll start over.*) Our school is about fifty years old…

このような形で、異文化コミュニケーションのギャップが起こるのである。それは、とりもなおさず、そ

れぞれが自分の文化の価値判断、思考形式に縛られているためである。このような文化の壁を乗り越えるためには、互いに相手の文化を尊重し、寛容な態度で相手を理解するよう努める必要がある。今日のグローバル化された社会では、異文化間の違いを乗り越えて相互理解を達成することが大きな目標となる。

５　最後に

これまで、2020 年の東京オリンピックを迎えるにあたり、英語でのコミュニケーションを通してどのように異文化理解を達成することができるのか、議論してきた。それは、ただ単に英語のスキルの問題だけでなく、いろいろな文化的な問題をはらんでいる。コミュニケーションの背後にある発想の違いや価値観の違いなどについて awareness（意識）を高め、前向きで寛容な態度を育むことが求められる。そのためには、英語のスキルだけでなく、日本人としての教養を養い、異文化の人と接する上での豊かな人間性を育むことが肝要となろう。

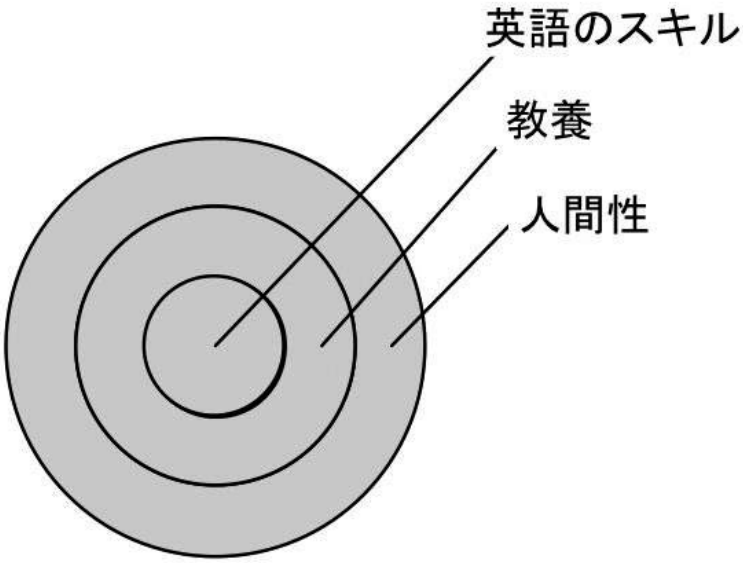

図３：国際理解のための英語コミュニケーションに求められる資質

※　この小論は、2016 年 2 月 28 日（日）、神奈川県立国際言語文化アカデミアで開かれた「公開講座：異文化理解のための英語コミュニケーション」にもとづき、加筆修正したものである。

参考文献

池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』大修館書店、1981.
田中春美、田中幸子（編著）『社会言語学への招待』ミネルヴァ書房、1996.
西田ひろ子（編）『異文化コミュニケーション入門』創元社、2000.
箕浦康子『子供の異文化体験』新思索社、2003.
Hall, E. T. *Beyond Culture*. Doubleday & Co., 1976.

Kaplan, B. R."Cultural Thought Patterns in Inter-Cultural Education,"*Language Learning*, 16, 1966, pp.1-20.

Sakamoto, N. & S. Sakamoto. *Polite Fictions in Collision: Why Japanese and Americans Seem Rude to Each Other*. Kinseido, 2004.

Tannen, D. *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. Quill, 2001.

（元・目白大学教授、東京大学名誉教授）